船ぞこの人びと

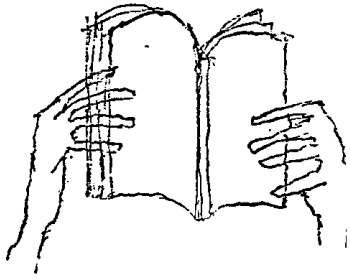
すばらしい少年時代（第二部）

那須田 稔

船ぞこの人びと

すばらしい少年時代（第二部）

那須田 稔



NDC 913　8093-064006-7764

ポプラ社の創作文学 6

船ぞこの人びと

〈すばらしい少年時代・第二部〉

定価 五五〇円

著者　那須田 稔（なすだ みのる）

発行　昭和四十五年十月二十日©

発行者　久保田忠夫

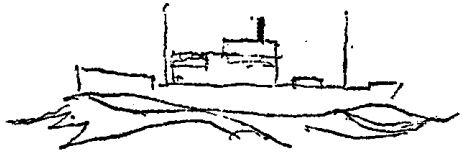
発行所　株式会社ポプラ社
東京都新宿区須賀町五（〒一六〇）
振替東京一四九二七一

印刷　新興印刷製本株式会社

製本　石毛製本株式会社

著者との話しあいにより検印は省略します。
落丁・乱丁本はいつでもおとりかえします。

はじめに



この〈すばらしい少年時代・第二部〉は――

第一部「文彦のふしぎな旅」にひきつづき、ひとりの少年の心の歩みをたどります。

舞台は、第一部では「大陸」でしたが、この物語では「海」へ移ります。「海」は、少年のふるさと、日本へむかう道です。やさしいようにみえて、危機がたくみにかくされている道でもあります。

この「海」ですごす九日のあいだに、少年は、どのような人びとや事件に出あうでしょうか。そうして、飢えと孤独にさいなまれながら十三歳の誕生日を迎えた少年の心には、どのような世界が描きだされるでしょうか。

那須田　稔

もくじ

第一章 ―― 道（その一）

1 陰気な人びと 8

2 李さんの家 15

3 道（1） 27

第二章 ―― かくれんぼ

1 小さな男の子たち 38

2 詩集 46

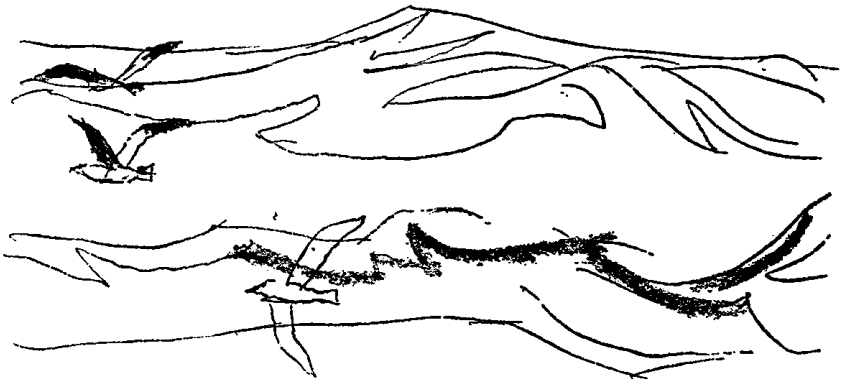
3 かくれんぼ 55

第三章 ―― 死と誕生と

1 嵐のあと 72

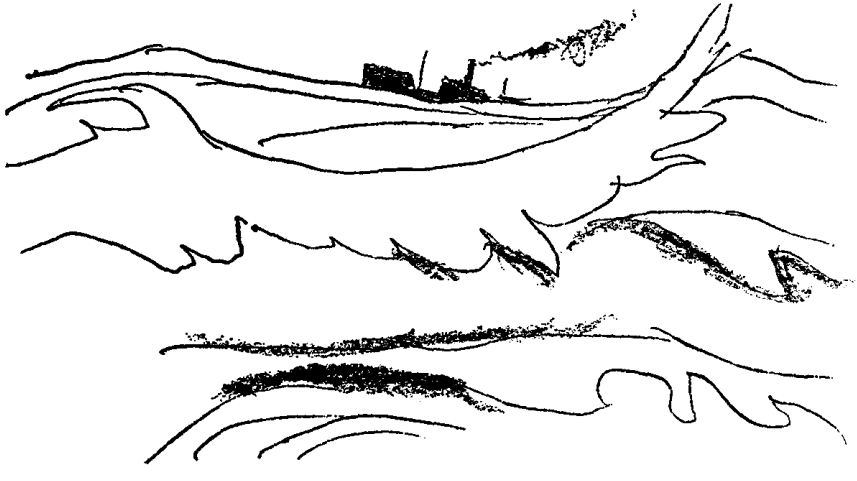
2 沈黙の少女 84

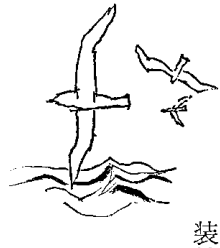
3 いのちの誕生 91



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第四章 波と月琴と
1 海の幻想 106
2 釣りあげたもの 119
3 白い航跡 141
第五章 故郷をめざす
1 「郷」の字 162
2 故郷をめざす 174
3 機雷だ！ 179
第六章 道（その二）
1 ひとり立ち 188
2 別離 196
3 道（2） 203
解説 黒沢浩 216





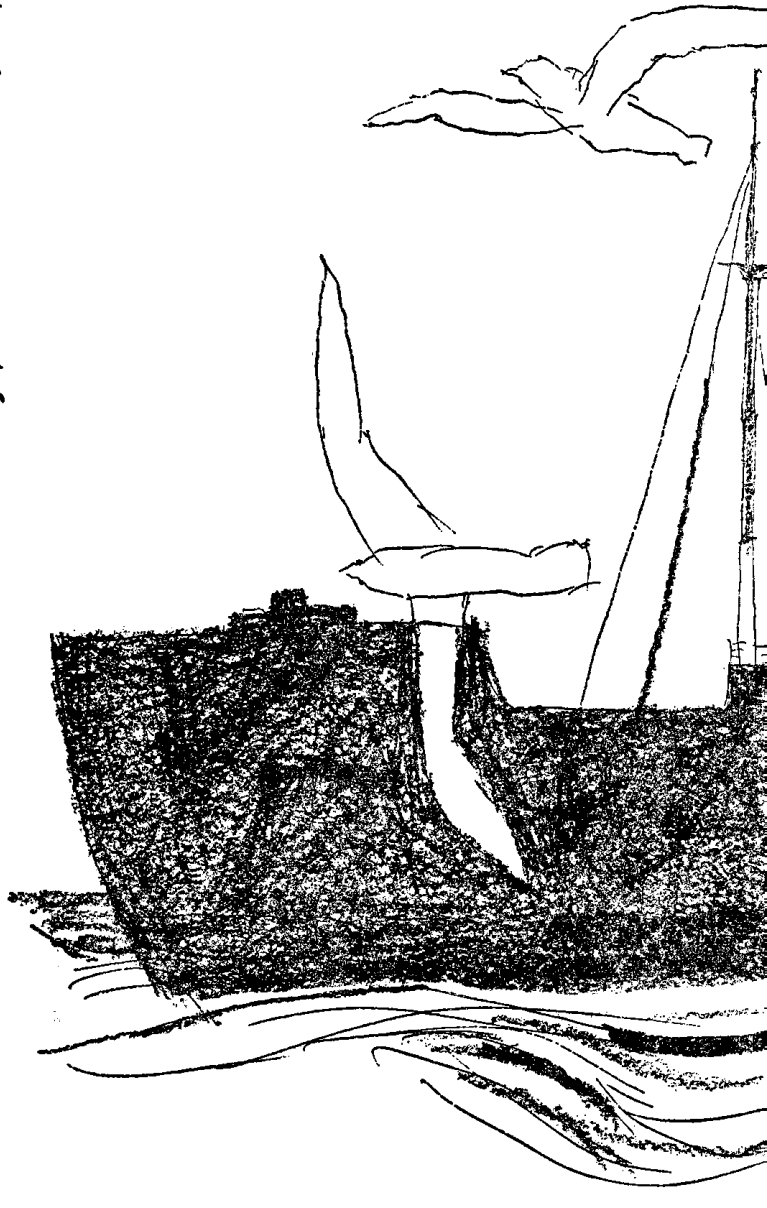
装幀・さし絵

鈴木義治

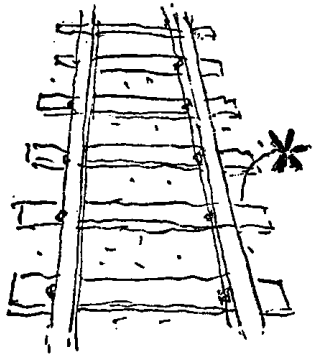
船ぞこの人びと

〈すばらしい少年時代・第二部〉

那須田稔



第一章　道（その一）



1 陰気な人びと

文彦は、横ゆれする船ぞこでエンジンの響きにからだをこきざみにふるわしていた。船ゆれのたびに、ハッチからぶらさがっている鉄ばしごが壁にあたってカチャカチャと音をたてる。エンジンのにぶい響きと鉄ばしごの金属音を聞いていると、文彦はじぶんがだんだん落ちつきを失っていくのを感じていた。

だれからも相手にされないという感じからくる不安が、文彦にとりついて離れなかった。べつにじぶんでは動かすつもりもないのに手足がぴくぴく動いたり、からだを起こそうなどとは思わないのに、背骨のあたりがぐいと硬直することがあった。それはどこか文彦のからだの内部を錐でもまれるような不安だった。その不安からのがれだすには、水にとびこんで泳ぎたくなるようなわけのわからない不安だった。理由もないのに動悸がひどく高まったりした。そして、文彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

は、だんだんとやせ細るのを感じていた。
それはまったく不安の中に呼吸しているようであった。
いま、文彦のいるすり鉢がたの船ぞこはむし暑く、まるで湯の中につかっている感じだったし、そばにつかれきって棒のように横たわっている二百数十人の人びととは、まだろくに口もきいたことさえなかった。かれらは、乗船したときにてんでんばらばらにきめた〝寝床〟で、よごれて、ぺしゃんこのリュックサックを枕に、光のない目を黒い天井にむけて船ゆれといっしょにゆれ動いていた。
その人たちが、どんなところで、どんなふうな生活を送っていたのか文彦は知らなかった。
ただ、土地をひらき村をおこし商売をし官吏や会社員といったような、つまり、世間一般のありきたりな平和なくらしをつづけることを、敗戦によってたちきられ、ぼろくずのようなかっこうで日本へ帰っていく人びとであることだけはたしかだった。
文彦の右どなりには、文彦と同じぐらいの年かっこうの少年が、黒い帽子をまぶかくかぶり綿入れの服を着て顔じゅう汗をふきだし天井をながめていた。ときどき船が大ゆれすると、ごろごろところがってきて文彦にぶつかるのだが、声ひとつあげずに、またもとの〝寝床〟へはっていくのだった。顔のよごれが汗にまじり灰色の模様になって目から鼻にかけてはりついている。船

ぞこの人たちが、だれもが上着をぬぎシャツ一枚か上半身裸になっているのに、この少年は帽子も綿入れの服もぬごうともしないでおしだまっているのだった。

その横には老人がねむりつづけている。黄色いしみのついた白麻の、それもだぶだぶの中国服を着た老人は、枯木のようなからだを壁にはりつけて目をとじていた。さわればポキポキと音をたてて折れそうな腕と足、土色のしわだらけな小さな顔には血の色はすこしも見られなかった。老人が生きているということがわかるのは、やせたひらべったい胸がかすかに上下していることぐらいだった。

文彦の前には、はあはあと肩で息をしているしみだらけの顔をしたおなかの大きな女の人がいた。三十ちょっとすぎぐらいのその人は、おなかの赤ちゃんをなでながらあえいでいるのだ。そのまわりには四人の小さな男の子たちがいて、だきあうようにひとかたまりになって寝ている。

左どなりには、髪をスカーフでくるんだ、まだ若い女の人が本を読んでいた。かすりの着物を改良した、着物と洋服のあいのこのような服を着て、なげだしている足にきちんと毛布をかけている。

船ぞこの人たちのなかで、文彦がさいしょに親しさを感じたのはこの人だった。しかし、文彦と目があっても表情を動かそうとしなかった。本を読んでいないときには、つれの夫の足をも

んでいた。

その夫は、ひどく野卑で醜悪だった。

しょっちゅう歯をがつがつ鳴らし、わけのわからないことばをぶつぶつつぶやいていた。ボタンがちぎれ、よれよれになった背広の下にはなにも着ていなかった。はだけた胸に黒い毛がはえているのも不潔だったし、下あごの張った、いつも人を見すえているような目つきの顔も不愉快だった。右のほうの足の自由がきかないらしく、歩くときには松葉杖を使っていた。

文彦は、隣人たちをながめ、じぶんがひとりだということをあらためて感じるのだった。そばにいるのは心のかよわない〝他人〟だった。あたたかないのちのふれあいがすこしもない船そこの中で文彦の心はからっぽだった。ここから逃げだし、ほかにいくところがあればどんなに救われるだろう。けれども千三百トンの貨物船のまわりは、海であった。戦争中に、輸送用に使い古された、どこもかしこも錆ついている老朽船は、波がうちつけるたびに、みしみしと悲鳴をあげた。

船は、東シナ海に面した中国領コロ島から、朝鮮半島を東北にのぞむ玄海灘にむかって時速十四ノットのおそい速度でのろのろと動いていた。

ところで、船員の話では、この海には戦争中に浮かべた機雷がまだ散らばっているという。い

つ、機雷に船がふれるかもしれなかった。

マストの見張り台では監視員が、海中に漂流する機雷をさがして立ちつくしていた。

出航してから二時間もたっていないというのに、避難訓練は、二回もつづいて行なわれた。鐘の合図とともに壁にかけてある救命ブイをからだにつけ、甲板にかけあがる訓練に、人びとはつかれきっていた。

船員が、機雷にふれたら船は瞬間にまっぷたつに折れ、あっというまに沈んでしまうだろう、そうすれば船にいる半分は助かるまいなどとうっかりもらしたので、人びとは緊張しきっていた。

まっさきに甲板にかけあがり、だれよりも先に一隻しかない救命ボートにすがりつくか、海へとびこまなければと、鐘の合図とともに鉄ばしごをよじのぼる人びとの顔は殺気だって見えた。

相手かまわずけとばしつきとばし、手をのばして鉄ばしごにぶらさがる。なき声、怒声、悲鳴。船そこはきちがいじみたさわぎだった。訓練でさえこうなのだから、実際に、船が機雷にふれたときには、どんな光景になるかと思うと文彦はゆううつだった。

しかし、文彦のまわりにいるおなかの大きな女の人と子どもたち、右足の不自由な男と、その若い妻、老人と少年は、船員たちからどんなにどなられても、避難訓練に加わろうとはしなかった。

「どうせ、死ぬときは死ぬのさ。じたばたしてもはじまらん。」

足の不自由な男は、ふてくされたようにいった。

ほかの船ぞこの人びとにくらべて、この人たちはどこか陰気だった。つかみどころのないぶきみさをただよわせていた。そのぶきみさがどこからくるのかよくはわからない。それでも、人びとから文彦は、この陰気な人たちの仲間のように思われていた。文彦がさいしょにあったのも、この陰気な人たちだったし、乗船するときもいっしょだったからなのだろう。

文彦は、まる窓から外をながめ、波がしらがじぶんにむかって襲いかかってくるのを見ると、あわてて顔をそむけた。

もの悲しい余韻をのこして汽笛が鳴った。

となりの足の不自由な男が、若い妻に、

「足がしびれる。ちがう、そこじゃない。もっとふくらはぎのほうだ。おまえは、看護婦をしていたのに、足のもみかたひとつできないのか。」

と、ぶつぶつともんくをいいつづけている。

文彦は目をとじる。また、大きく船がゆれる。ゆれる頭の中に、すぎ去っていったいままでのことが、つぎつぎと浮かんでくるのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com